

名探偵読本——2

メグレ警視

Commissaire Maigret
長島良三編



★ シムノンについて

私の会ったメグレ

メグレのバイブ

メグレ警視論

英米におけるメグレ像

メグレ警視事件簿

メグレ以降の探偵たち

メグレ警視のお好み料理

メグレ警視関係年表

メグレとボンドの世界を語る

メグレほとんど最後の事件

北の星——本邦初訳中編

座談会「メグレの世界」桶谷繁雄＋都筑道夫＋長島良三



Detective Scrapbook—2

パシフィカ
フレジテント社発売

シムノンとメグレ

桶谷繁雄

私はシムノンが偉大な小説家、おそらく最も偉大な小説家、今日のフランス文学のなかにわれわれが持つ本当の小説家であると宣言する。

——アンドレ・ジイド

戦後、一九四九年にフランス政府から招かれてパリに行った私であるが、戦後パリに行った日本人としては、私とお茶の水女子大学の湯浅年子さんの二人がはじめてではなかったかと思う。行って間もなく、切符制度であった砂糖の配給が自由化され、これで戦争の残した物資配給制度は全部なくなったと、新聞などに書き立てられていたから、バリもその華やかさを取り戻しつつあった頃だと言えるわけである。デパートにも品物は豊富に出廻っており、ひどいインフレの日本人総貧乏の東京から行った私の目には、バリはまるで天国のように思えた。

航空機の旅行などはまだなかったから、横浜からフランスの貨物船に乗って二カ月以上かかってマルセイユに上陸した。汽車でパリに着いて、ともかく、宿が必要である。どういうわけか知らないが、おそらく、タクシートの運転手の紹介だったと思うが、私はモンバルナスの墓地の近くのラスバイユ大通り二三番地のエーグロン

下宿としては、戦前の名ヴァイオリニストとして、また美貌の少女として有名な諏訪根自予さんが厄介になっていた、サン・サーン街のマダム・カメンスキーの所をあてにしていたが、その部屋はふさがっていて、半年先でないと空かないという。研究所は郊外のムードンで、そこに下宿を探したのであるが、ムードンの下宿の見つかるまで、モンバルナスのエーグロンに滞在したのであった。乞食のような服装の日本人がすぐにバリツとした服装になったのを見て、ホテルのコンシェルジュが、大げさな表情で手をひろげて「コム・ヴー・ゼット・ボー！」（まあ何て立派になって……）と言ったのを忘れない。

このホテル・エーグロンが、私をメグレに結びつけてくれたといえる。セーヌ左岸のこのモンバルナスは、サルトルで有名なサン・ジェルマン・デ・プレと並んで、その華やかさを競いだしたのである。ダンスをやらず酒を飲まぬ私には、ナイト・クラブは用はないが、クーポール、ドーム、ロンドンなどの大カフェは、それぞれ別の雰囲気を持っていて、コーヒール一杯で楽しい時間を過せる。研究所はモンバルナス駅からヴェルサイユ行の電車に乗って三十分も行った所のムードンであり、駅のすぐ横に国立の研究所がある。科学研究所らしからぬ洒落た建物で、エレベーターにはPBという文字が組合わされた鍍鉄製の扉がついている。かつての有名な舞踊家イサドラ・ダンカンが開いた、バヴィヨン・ブルーと言う連れ込み用のホテルだったものである。勤務は五時に終るから、夜の食事はどうしてもモンバルナスでする事になる。だから、私はロンドンの御常連であった。

モンバルナス通りには、何軒かの書店がある。そこで、私はシムノン著『男の首』というメグレ物の初期の作品を買った。それを読

というホテルに入った。ホテルの格を示すマークの星が二つだったから、そんな安宿ではない（今日では三ツ星に昇格しており、私がきっかけになったのか、日本人のツーリストが多く、コンシェルジュ〔問〕は日本語を話す）。下宿がきまるまで、ここで数週間を過ごしたのであった。また、パリに着いてすぐ、国立研究所の本部をセーヌ河畔で探して、その総務部に顔を出した。到着の報告のためである。すると、会計へ廻ってくれという。会計では私のパスポートを調べてフランス船に乗船の日を確かめ、私の目の前に厚い紙幣束を出して受け取りのサインをしろという。このお金は何ですかときくと、あなたの月給は××フランで、横浜出発の時から受給の資格を生じたのであるから、その日から今日までの約二カ月の月給であるという。その時貰ったお金は、三十万円ばかりではなかったか。当時たかだか数千円の月給の東京工大の助教授で、フランスに行くというので、古着を買って、靴もアメリカ兵の古靴という、乞食みたいな服装の私が、思いもかけず夢のような大金を貰ったのである。私は翌日、デパートに行って、頭の Teppan から足の先まで、全部新品を買って服装をととのえた。五、六万円ですれができたのであった。昭和二十四年の事である。

むと、その終りのところに、モンバルナスのエーグロン・ホテルにて執筆と書いてある。コンシェルジュにそれを見せて、シムノンはここに滞在していたのかときくと、昔の事は知らないが、そのように言われていますとの答であった。偶然ではあるが、『男の首』が面白かったので、私は手当たり次第にメグレ物を買って来ては読んだのであった。シムノンの作品とのつき合いは、だから昭和二十四年（一九四九）からなのである。もう三十年ばかりたつ。そして、シムノンには、メグレ物だけでなく、本格的な小説の多いのに気づいた。そうしたのも好んで読んだ。

私は、フランスの小説家の中では、フランソワ・モーリアックが好きである。日本においてはアンドレ・ジイドの方が有名であるが、ジイドの都会的なのに比して、モーリアックはきわめて土着的である。ボルドー近くの田舎の地主の家で起る話なので、いかにもフランス的である。だからフランス人とよく議論をして、ジイドよりはモーリアックの方が小説家としては上だと主張する私であった。それで、モーリアックがジイドよりも早くノーベル賞をとった時、私は大得意であった。

そのモーリアックに比して、ジョルジュ・シムノンはどうなのかと言え、小説の題材のとり方が全く違うし、その書き方も違う。

シムノンの小説がジイドを驚嘆させた話は有名であるが、私がフランスに滞在していた頃から今日に至るまで、ジョルジュ・シムノンにはノーベル文学賞がささやかれているのであり、小説家としての力量は、何と言っても一流であるといえよう。また、映画化された作品がきわめて多い。だが、そのシムノンが娯楽用としてメグレを書いているのであり、売れる数から言えば、シムノンがロマン・ロマンと呼んでいる本格小説よりもメグレ物は数百倍ではないだろう

か。それは、ヨーロッパの自動車旅行を二回やっている私が、小さな町の本屋に入つて見ると必ずと言ってよいくらいに、その国語に訳された廉価版のメグレ物を見たからである。日本においても同様で、ジョルジュ・シムノンの名は、メグレ警視物で知られているといつてよい。ここで、シムノンあるいはメグレについての旧稿二つを、重複するところはあるが読んでいただきたいのである。

シムノンに会つて

ジョルジュ・シムノンを私が訪ねたのは既に五年前のことである。一九六八年五月一日、日本でいえばメイ・デーであるが、その日、私は娘と共にバリーで借りたブージョーを運転してジュネーヴのホテルを離れ、自動車道路を飛ばしてローザンヌの町に來た。シムノンの家が、ローザンヌの郊外であるとしか知らない私は、町の入口の小綺麗なカフェーに入つて、コーヒーを注文しながら、エバランジュにはどの道を行けばよいかと給仕に訊いた。

すると、何人かいた客が皆私の方を見て、「エバランジュの誰を訪ねるのか？」という。

「ジョルジュ・シムノン」と答えると、一同はさもありなんという表情をした。

「この町で、シムノンさん知らない人はいませんよ」といって、給仕は道を教えてくれた。「まるで兵營のような感じの大邸宅だから、すぐにわかりますよ」とも言った。

そもそも私がシムノンの著作に触れたのは、言うまでもなく「メグレ」物によってなのである。このバリー司法警察の警部の犯罪捜査

は大体次のようなものであった。

メグレの家族の状況、家庭生活、公的な活動における部下の者たち、メグレの癖から部下達の性格、こうしたものは、既にきまつてしまっている。多数の読者は、そういう「わく」を既成事実として受け入れた上で、メグレ物を愛してくれている。この読者の持っている「イメーじ」を作者としては壊したくない。壊せば世界中の読者から抗議の手紙がくるだろう。だから、メグレ物は、あくまでもこの「わく」を守る。バリーのリシャル・ルノール通りの家庭、やさしい奥さんのいろいろな習慣、ロワール河畔の別荘、その風景、こうしたものもあくまで守る。しかし、それでは窮屈ではない。だから他の小説においては、メグレ物と全く異質と思われるようなものを書くのである。

こうした話と共に、奥さんの話もした。現在の夫人は二度目で、かつてシムノンの秘書をしていた人である。その奥さんは、長い間ノイローゼで入院しているとのことであつた。寒い土地であるが、大きな室内プールも作られてあり、冬は暖められるとのことであつた。また、意外であつたのは、邸内に小さな病院のような設備があり、薬品棚には多数の医薬品が並び、虫垂炎の手術ぐらいはできる外科室もあつた。勿論、ことがあれば、ジュネーヴやローザンヌから名医といわれる人を呼ぶのであるが、手ぶらで来てもらつても、何も不自由しないようになっていてと語っていた。地下の葡萄酒倉庫は見事であつた。

日本にも多数の読者がいるし、あなたの行動はインターナショナルだから、日本を訪ねないのはおかしいではないかと私が言った

のやり方は、英国ものと違って謎解きの要素は極めて少ない。コナン・ドイルの小説は、高校時代の英語の教科書として使われ、シャーロック・ホームズは私にとって極めて親しい存在なのであるが、そうした目から見て、メグレ物には非常な魅力をおぼえた。

それは、事件の雰囲気、環境から、犯人の心理にまで入っていくのがシムノンのやり方で、この方がはるかに人間的な感じがした。メグレはホームズのような超人ではなく、平平凡凡たるフランスの田舎ものという点もよいと思った。私は英語よりもフランス語の方が得意であり、しかもバリーには前後五年間の生活をしているから、メグレの活躍する舞台はすべて知っている。知らなければ、早速オートバイ（これはまだ貯金ができていない頃のことである）や自動車を駆って行つて見るといふことをやった。メグレ物の本は、ほぼ揃えて持っている。

しかし、ジョルジュ・シムノンの小説家としての存在は、メグレ物以外に多くの本格的な小説のあることで、アンドレ・ジイドなども高く評価していたのである。多岐にわたるので細かいことは言えないが最近作（一九七一年）の「ガラス張りの小部屋」などは、平凡な生れと育ちの男が、バリーの印刷会社の校正係りとして平凡な生活を送っている。それが隣人の若妻を、外見적으로는何の理由もなく殺害するのであるが、しかし、この本を読んでいけば、最後の数ページの殺人事件が、いわば必然のものであつたことがわかるのである。

こうした小説は、メグレ物と非常に違い、メグレ物には全然触れられない「セックス」が、どぎつくり表面に出ているのである。シムノンに家の中を案内され、用意された昼食を食べながら、私はメグレ物と他の小説とのこの差異について訊いてみた。彼の答

は、是非訪ねたいと言っていた。ところが最近、シムノンは健康を害し執筆活動は止めるとの声明のあつたことを日本の新聞が伝えた。私は詳しいことを知らせろという手紙に、更にシムノンのことを書いた東京新聞の切抜きを送つたら、昭和四十八年二月二十一日シムノンから感謝の電報が届いた。これからどうするのか、ファンの一人として気がかりである。

（『世界ミステリ全集15』月報一九七三年四月）

メグレの周辺

江戸川乱歩氏の元気な頃、「寶石」誌にこれと同じ題名の文章を一年間連載した記憶が私にはある。いつも大坪直行君が拙宅に原稿をとりに来ていた。その頃の「寶石」は、どこか探せば出てくる筈であるが、この原稿を書く急場の間に合わないの思いつくままに、メグレ物を読んで覚えていた事を書くことにしよう。

ジョルジュ・シムノンがメグレという探偵を創造した時は、何かモデルがあつたのかも知れないが全く自由に書いていた。それは、メグレ物の初期の作品を読めばわかる。然しメグレ物が好評を博して次から次へと書かれるにつれて、メグレという人間像が次第に固まり、はつきりしていった。部下として協力するリュカとかジャンヴィエ或いはラボワントとかいう刑事連中のイメーじも固まって來た。しかも、メグレ物が映画になると、イメーじも具体的になるわけである。このようにして作り上げられたメグレ像に、作者シムノン自身が縛られるようになる。多数の、世界に散らばっている読者の持っているイメーじを損なわぬように、細心の注意をもって書か

れねばならない。だから、そういう窮屈な「わく」を離れた、メグレ物以外のシムノンの小説には、強いセックスの臭気があるので、メグレ物にはそれが全くないのと極めて対蹠的である。

シムノンは、メグレ物のこの「わく」を強く意識していた。それを破ることは、愛読者に対する非礼と考えていた事は、私がシムノンをエバランジュに訪問した時に強く感じていたところである。たとえば、アルサス生れの、きわめて家庭的なメグレ夫人をだます、或いは裏切るような行為、つまりメグレが他で浮気をするような事は、充分考え得るけれど、そんな事を書いたら、全世界の愛読者から抗議の手紙が山のように来るであろうことを、作者シムノンは心得ていた。既に出来上った「わく」を飽くまで尊重しなければならなかったのである。

それでは、どのような「わく」がメグレ物にあるのかを、私は思いつくままに述べて見たい。その第一は、メグレの勤務する司法警察であろう。日本と警察制度の異なるフランスの、この警察のことを説明するのは難しい。日本は警察庁というものが有り、各県に県警本部というものが置かれている。警視庁は東京に置かれ、これは警察庁に含まれる。フランスにおいては、一般警察（治安維持、交通）、政治警察（国家の安全のためのもので、戦前の日本にもあった特高に相当する）、司法警察（各種犯罪の捜査、犯人の追求など）、機動隊（内務大臣直属）などに分れていて、メグレは、この司法警察に属しているわけである。バリの警視庁は、特別な組織で、バリの治安維持と、交通の安全を主たる仕事としており、パリ市内の犯罪は、司法警察の担当となっている。

司法警察（ポリス・ジュディシエール）という役所の建物は、パリを流れるセーヌの中の島にある。そこはオルフェーヴル河岸と呼

さて書かれた年代は一九五一年であるから、メグレがこの世に現われてから、二十年以上後の事になるが、『メグレの最初の事件』という小説がある。時は一九一三年、メグレはまだ若く、ラ・ロシュフーコ街のサン・ジョルジュ警察署の署長秘書をしていたのであった。これが十九歳か二十歳という設定であるから、メグレの年齢はこれできまってしまう事になる。つまりメグレの生れたのは、一八九三年か九四年といえよう。警官になったばかりであるが、警官になったのも偶然のようである。家が貧しいために医者になりたい希望も果せずパリに出て来た時、同じ下宿にいた親切な老人（若いメグレの目から見て）が警察官であり、その手引きで警察に入ったのである。

このメグレが故郷での小学校の同級生の手引きで或る立派な家のパーティーに出る事になった。その家は建設省の高官の家で、出入りするものは、ボン・ゼ・ショールセと言われる、道路、橋梁など土木関係の専門校（東大工学部の土木学科に相当しよう）の卒業生ばかりであった。学歴もなく、一介の巡査にすぎないメグレが、その家の親戚で、そこで花嫁修行をしていた適齢期のお嬢さんのおめがねにかなって結婚することになるわけで、話はうまく出来すぎているわけではないが、このようにして仲のよいメグレ夫婦が出来上がるのである。建設省の高官はアルサスの出身であるから、メグレ夫人も同様で、従ってメグレの家には常にアルサス産の梅酒などが備えられていることになる。

この夫人がなかなかの賢夫人で、何事にもよく気がつき、優しく、りこうであるが、若しかすると作者シムノンの理想の女性像を、ここに描いていると推測する事もできる。シムノンの結婚生活は、決して幸福ではないと私は考える。二度目の奥さんもノイロー

ばれる。裁判所、バリ警視庁は、すぐ隣りといってもよい位置で、ノートル・ダム寺院の横である。ここに毎日、メグレは、リシャル・ルノアル大通りの自宅からバスで通勤している。このリシャル・ルノアル大通りは、バスチーユ広場から、レビュブリック広場を結んで南から北へ弧を描く大通りであり、庶民の町といえるであろう。バスチーユ広場から勤め先までは、距離は約二キロメートルである。歩いても行ける。然しリシャル・ルノアル大通りは相当長いので、メグレの住居の番地がわからない限り、何ともいえない。レビュブリック広場に近いとすれば、司法警察まで四キロを少し越える程度である。この大通りには、ブレゲ・サバン、リシャル・ルノアル、オーベルカンブの三つのメトロの駅がある。メグレ夫人がメトロを利用する時はリシャル・ルノアルからであるから、メグレの住居はリシャル・ルノアル大通りの真中あたりといえるだろう。

メグレ物を読んでわかる事は、このメグレの住居にエレベーターがないという事である。メグレのアバルトマンはおそらく五階か六階であるらしい。だとすると、毎日の昇降は大変な苦勞であろう。筆者のバリ時代のアバルトマンの建物には旧式のエレベーターがあったが、レビュブリック広場に近いヴァイオリンの先生のアバルトマンにはそれがなかった。毎週階段を歩いて六階まで上るのはつらいので、良い先生であったが、やめてしまった記憶がある。このあたりの建物は、建造年代が古く、庶民住宅なので、エレベーターがないのが普通だといってよろしかろう。だから冬になると、地下室から、上へ石炭をかつぎ上げるアルバイトが繁昌するわけなのである。

せでずっと入院生活を送っている筈であり、シムノンに最も欠けているものを、メグレの妻として登場させたと考えても、決して考えすぎではないであろう。

メグレについては、役所のその部屋にある大きな錫鉄製のストーブを忘れてはならないであろう。これはパイプについても同様である。司法警察でセントラル・ヒーティングがなされるようになったのは、第二次世界大戦後の事であるが、メグレは特別許可を得て、このストーブを事務室に置いたままにさせた。然し結局、取り去られた。パイプはいつも五、六本は机の上に置いてあり、強くて臭いフランス専売局の黒たばこを吸う事になっている。

煙草について言えば、われわれ英国風或いはアメリカ風の煙草に馴れている人間は、フランス大衆向けのゴロワーズとかセルティック（これは高級品）を始めて吸って、何とまずい煙草だろうと思う。然し馴れてみると結構うまい。フランス人は、英国やアメリカの煙草を「人工的すぎる」と言って嫌う。たしかにフランス煙草は強いけれど、自然に近くさっぱりしている。そしてこれは、フランス人の飲む濃いコーヒーや葡萄酒ともよく合う。フランスのパイプはロップというのが最もポピュラーであるが、その生産地サン・クロードは、フライヤー・パイプ発祥の地であり、だから、フランスでは良いパイプが安く買える。そうしたパイプで、フランスの黒いパイプ煙草を吸う。それができるまでには、どうしても半年間以上のフランスの生活の馴れが必要であろう。

シムノンを筆者が訪ねたとき、書斎には、数十本のパイプが飾ってあった。その中の、漆仕上げの一本のパイプは、日本人から贈られたものだと言っていた。誰が贈ったのであろうか。筆者もパイプ

の愛好者であるが、これらのパイプは、いずれもそれ程高価なものとは思えなかった。シムノンはいささか平凡なパイプを好んでいるのかも知れない。

メグレは、昼の食事に家に戻れない時は、司法警察の近くのブラッスリー・ドーフィヌスへ行く。又、犯人を調べて腹の空った時、ここからサンドウィッチとビールを運ばせる。ブラッスリーとはビヤ・ホールの意味である。実際に、これに相当する店はないが、あの中島の島にこうした店があっても少しもおかしくはない。パリはこの中の島から生れたと言われ、中の島の西半分(裁判所、司法警察をふくむ)が第一区に属していて、この区の中にはレ・アルと言われる市場があり、その周辺には有名料理店がひしめいている。又、セーヌをへだてた対岸は五区と六区であるが、これも料理店に事欠かない。ブラッスリー・ドーフィヌスの内部の状況など、実は少し古めかしい料理屋なら、それぞれの特色を持っていてなかなか面白いのである。メグレがよく使う料理屋にはシャンゼリゼのフーケなどがある。ここは、場所がいろいろな人の出入りするところで、そうした中で一流と言えよう。二階のボーイ頭であるシャルル君は私も顔なじみであるが、まだ元気でいるだろうか。モンバルナスのドーム、クーパーなどもメグレ物には出てくる。オペラ座近くだと、カフェ・ド・ラ・ペーなどが一流といえようか。然し、メグレ物でも最も活躍するのが、名もないビストロと呼ばれる居酒屋である。カウターは亜鉛板で覆われていたので、ここをル・ザンク(亜鉛)と呼んでいるが、道路工事の人夫だとか近所の小商人などが、ちょっとやって来ては白の葡萄酒をグラス一杯ぐらい飲んで、亭主とタベって帰って行くといった気軽な店である。食べる物は大した

ものはいらない。ゆで卵やクロアサン(半月形のパン)などがおいである。作るものはサンドウィッチぐらいである。これは日本におけるサンドウィッチと全く違う。バゲットと呼ばれる長さ三十〜四十センチの皮の固いフランス・パンを長手にそって二つに割り、そこにバターを塗ってから、ハムやチーズなどをはさみ込んだものである。固くて食べ難いが、とても美味しい。私は娘をパリにつれて行った時、これを味わせたら、娘はこれが大好物になり、今日でもフランス・パンを買って来ては、これを作っている。メグレがブラッスリー・ドーフィヌスから取りよせるサンドウィッチがこれであり、これとビールはよく合うのである。

パリには、あいまいなホテルが沢山あり、これはメグレ物にはおなじみである。そのあいまいなホテルというのは、日本流に言えば三階(これをフランスでは第二階という)以上を比較的長期の人に貸し、第一階(ブルミエール・エージュ)は、売春婦用にとつてある。こうしたホテルに、長くパリに住んでいたという日本婦人がいた。芹沢光治良氏の『パリに死す』のモデルである。この人は滞在が長いので、ホテルの女主人の代理をよくやる。そこに遊びに行った時、「ちょっと買物に行くから、桶谷先生、窓口についてよ」と頼まれて、私がフロントの番人をした事がある。たまたまその時に客が現れたのであった。見ると、上品な、四十歳あまりの非常に美しい人妻風の女性であった。思いつめたような顔をして「部屋がありますか?」という。「階段を上った右手の、十五号が空いています」といって、私は鍵をわたした。見ると、二十二、三歳の青年がうなだれて、その背後にいる。二人が階段を上って行くのを見て、私の血はさわいだ。パリに来て、ずっと童貞を守っていた

私であるが、女ざかりの美貌の人妻の浮気の現場に立会った形にたっただけに、何とも言えず心は波立ったのである。

買物から帰ったSさんに「お金を貰うのを忘れた」と私は言った。これは前金が例になっているのだが、いくら貰ってよいか私は知らなかったし、その客の人妻もあわてていたのか、お金の事は何も言わなかった。「婦人に貰うからいいのよ」と言ってくれた。それから、そのホテルのフロントの隅で暫くSさんと日本語で雑談をしていたが、私は胸が苦しくてたまらないので、早目に切り上げて帰って来たのであった。小説などに書かれてある事を、実際にこの目で見て、その印象は強烈であった。そして、このあいまいホテルの様子をいろいろと聞き、その利用者の生態などを知るにつれて、メグレ物の面白さというものが、わかるような気がするのである。

私は、日本人という、フランス人から見れば外国人である。その外国人がパリに生活してパリジャンの中に、自然に入っていく。滞在が長かったから(総計満五年)当然であるが、それでもわかり難いフランス人のメンタリティーがある。フランスの田舎に行つて生活してみると、狭い社会であるだけに、兄弟相姦、親子相姦、役人の不正などという事が、親しいフランス人を通じて耳に入ってくる。そう言うものに対する一般フランス人の心理の綾というものは、通り一べんのツリストには知る事ができないが、幸い長期滞在の私は、その一部を知る事ができた。メグレ物に限らず、シムノンの小説は、心理の綾の奥を開いて見せてくれる。勿論、ノーベル文学賞を貰ったフランソワ・モーリアックやアンドレ・ジイドの小説にもそれはある。けれど、メグレ物の扱う、犯罪小説の中に、それらが非常に鮮やかに端的に出ているので、私はこれらを愛読する

といつてよろしいであろう。犯罪、殺人などは一つの極限状況である。それだけに、フランス人のメンタリティーは、はっきりとこれに出てくる。(「ミステリ・マガジン」一九七三年九月号)

少し古い話をしたから、今度は最近の話をしよう。昨年ブロン社からジル・アンリという人が『メグレ警視』—あなたはどんなお人ですか—という本を出版した。これは、フィクションの主人公ではあるが、まるで実在の人物のように思われているメグレ警視の人柄とか生活、その生い立ちなどを、著者ジョルジュ・シムノンとの関連で実証的に調べているもので、メグレ物のファンには実に面白いものである。パリにいる友人が刊行後にすぐ送って来たので一読してから、日本語にする価値ありと認め、私はブロン社を通じて翻訳権をくれるように交渉した。在パリの友人とは、フランス海軍の造船中将ドレ氏で、戦後、昭和二十一年にこの人が対日賠償委員会のフランス代表として来日して以来のつき合いなのである。本年八十歳を越えた。ドレ氏の口添えが効果があったのか、ジル・アンリ氏は快諾してくれた。翻訳は進行中で、秋には河出書房から『創った人・創られた人—シムノンとメグレ』という題で出版できるのではないかと考えている。本年に入つて、この本はアカデミー・フランセーズから賞を得ている。

こうした時、今年になって、ジョルジュ・シムノン氏の二番目の夫人であったドニーズ・シムノンが『猫の前の小鳥』と言う本を書き、これもすぐにパリから送られて来た。発行はジャン・クロード・シモンと言う、あまり名の知られていない出版社である。全篇は、離婚の怨みに満ち満ちた復讐の書であるといえる。ル・モンド紙の一九七八年四月二十八日付のこの本についての書評は次のよう

に言っている。

「メグレ家の闘争——シムノン夫人の怨み」という見出しである。

最悪の事態が起るのかもしれない。夫に棄てられた妻がその不平不満を書物にする時、文学はほとんど問題にはならない。しかし、この夫がトルストイとかビカソとかいう聖なる巨人に匹敵するシムノンとなれば、語られている些細な事柄も、それなりに興味がある。その述べている事が、いかに部分的であり、また、身勝手なものであっても、その攻撃は巨人の脚を切り取ってきわめて普通の人間の水準にまで下ろしてしまうという利点を持つ。たしかに、シムノンは偉ぶった事はなく、むしろ反対に彼は自分はごく普通の人間で、その天才といわれるものは職業にすぎないと言っている。しかし、彼は二百五十篇の小説という立派な業績を持ち、これは誰にでもできるというものではない。だから、われわれとしては、右のような現象を説明するあらゆる証言を飽くことなく集めるのである。

誘惑者と傷痕——ドニーズ・シムノンの証言は、二十年にわたる夫婦の間の闘争を述べている。最初、赤い絹のパジャマを着た誘惑者であるシムノンは、彼女に対し悪罵の限りをつくす。「お前の腹の傷痕は何だ！ お前は妊娠した。そうだろう？ 私よりも前に何人の男を知った？ 数えきれないくらいだろう。おい、その名前を言え！」運の悪い事には、前の男の名前はジョルジュと言った。こうした思い出を揺り起さないために、嫉妬に狂ったシムノンはその名前を短縮するのである。ジョーとなったシムノンはおごそかに宣言する。「お前は、この俺と出会った日に生れたのだ」と、それから調教とも言えるものが殴打と悪罵をともなうて始まる。「淫売婦め、くたばってしまえ」そして、それがすぎれば涙ながらの後悔であ

そして、このような文章の裏に、われわれが彼女のこれほどの苦しみ、勇気、愛を悟るべきだとも言いただけである。なぜなら、彼女は暴君シムノンを愛している。そして、その苦しみを忘れ、自分の事を忘れ、小説のできあがる場面にうっとりとして立ち会った時、彼女は苦しさの叫びとないまぜになった創作の生みの悩みを次のように書いている。「俺はもう駄目だ！ 駄目だ！ もう絶対に書かない」と。彼の頭の中にまだ残っている小説中の人物を追いかおうと酒を飲むシムノンあるいはインスピレーションを事細かに追求するシムノンを彼女がこうに示す時、彼女の証言は、ジョルジュ・シムノンは情婦でもあり妻でもある女性に恵まれていた事を証明している。「猫の前の小鳥。」本当かしら！ 最後の角の一突きを与える前に夫という牡牛につかえ、励まし、罵ったフランス西南部のランド地方産の妻であった牝牛ではないかしら。

署名はガブリエル・ロラン。婦人記者である。

この『猫の前の小鳥』の書評が始めに書いた「最悪の事態が起るかもしれない」という予言が何かの影響を与えたのかもしれないが、一九七八年五月二十六日付のフランスの新聞は次のような小さな記事を発表している。

「パリ発——ジョルジュ・シムノンの娘マリ・ジョルジュはパリにおけるアトリエで自殺した。行年二十五歳。心臓にピストルを射ちこんだのである。数年来、彼女は鬱病に苦しんでいた。若くして、彼女は失踪をしたが、父シムノンはそれをもとにして『オディールの失踪』という小説を書き、それは七年前に公刊されている。

彼女は二通の遺書を残した。一通は父に、他の一通は数カ月来治療を受けてきた精神分析医に宛てられていた」

る。お殿様の気まぐれのままに、奴隷は、肥ったり、痩せたり、化粧をやめ、禁煙し、その乳房をホテルの葡萄酒係に見せ、シムノンがコール・ガールと寝ているベッドの中で寝かされ、出版契約や請求書を調べ、朝の風呂の温度をたしかめ、蝶ネクタイの選択をする。「私は五人の女の役をする一人の秘書を持っている」と、この幸福な男は威張る。その男の書くアンドレ・ジイドやマルセル・パニールへの手紙には『愛』の崇高な事を述べている。

そうした時、彼は落ち着きを取りもどしているのだろうか。残念ながら、そうではない。ドニーズの従順をもつてしても、喧嘩や殴打を避けることはできない。意に反して、彼女はとうとう結婚を決意する。そして状況はさらに悪くなる。アメリカの各地を旅した後、スイスのエシヤンダンの城に夫婦は居を定める。シムノン夫人は三人目の子を生む。そして、夫シムノンの言い分によれば、そこで身も心も崩れ去り、彼女は保養院に送りこまれる。精神分析医の意見が重視されているので、彼女はそこを出たとしても、誰も相手にしてくれる者はいない。彼女が不注意にも雇ったテレザという女が彼女の代りを家ではやっている。これこそ、彼女に対する最高の侮辱であり、それによって、彼女はこの復讐の本を書くに至るのである。

この本を読んで、われわれは納得するか？ するとも言えるし、しないとも言える。この本はパリのお針子^{ミイネ}の書くような文章で、メグレを創り出したシムノンは幼稚な「青ひげ」のようで、その犠牲者はあらゆる美点を兼ね備えている。「小さなタグラ人形」「すばらしい女性」「百合のような顔色、うるしのような黒髪、銅のように強い神経」など。ビエール・ラザレフからド・ブローイ公爵に至るまで彼女をほめちぎり、彼女はそれを嬉しそうに書いている。

私はこのマリ・ジョルジュ通称マリ・ジョーにエバランジュ訪問の時に会っている。当時十五歳であったわけで、長身の足の美しい少女が、舞うようにしてサロンに入って来たのを覚えている。私が娘を同伴していたからであらう。

本稿ですでに述べたように、一九七三年以降ジョルジュ・シムノンは創作の筆を捨てた。ローザンヌ郊外のエシヤンダンの兵營のような邸宅を売りに出し、ローザンヌの町の中の高層ビルに移ったが、オイル・ショック以来停電になった場合エレベーターが用いられぬおそれから、その側に小さな家を買って、テレザと末の男の子の三人でひっそりと暮らしている。そして、毎日の感想をテープレコーダーに吹きこみ、これを本の形にしてブレッヌ・ド・ラ・シテ社から公刊している。モノログ集とでもいえるようか。現在私の手許に届いているのは、『我等の木蔭で』と題されるもので、一九七六年四月十三日火曜日の日付が最後である。最新のものは、一九七六年六月十四日付である。前者について、どんな事を言っているのか紹介しよう。

「最近話した事のある人間の運命の種々のあり方について、私が例外的でもあり、典型的でもあると思われるものが一つある。

このたびは、名前を出す事ができると思う。なぜなら、私と同年齢の人を除けばほとんどの人はそれを忘れてしまったと思うからである。

一九二〇年頃、私がパリに來たばかりであるが、一人の男が社交界の、いわば王様とも言えるのであった。その名はポール・ボアレ^{ボアレ}と言ひ、デザイナ^{デザイナー}であった。彼は当時の婦人の流行を支配していたあらゆる規則を完全にひっくりかえしてしまった。

特に、彼は婦人の色彩とそれらの調和に関する好みを、鮮やかな色、はつきりしたコントラストの品物を売り出して、すっかり変えてしまい、当時誰も考えなかった形を作り出したのであった。

彼の成功は輝かしい勝利と言えるもので、彼はバリの真中に立派な大邸宅を手に入れた。彼はそこで年に数回もの豪華な宴会をひらいた。それは一晩中続き、バリの有名人といわれるすべての人たちは招待される事を望んだ。

パリで、これ以上豪華な宴会はこのボアレ以後開かれた事はないと言える。

それは数年続いた。ボアレは金の勘定をしなかったし、また、出来なかった。右手で受け取った金は左手が使ってしまった。

やがて彼は破産をした。あの豪華な宴会をやり、何百万の金を使ったボール・ボアレは一銭の金もなく、一人の友人もいなくなつた。

気落ちをしたとか、屈辱的な態度を示すとかをしないで、彼はあっさりと言浪者になった。汚れてしまったけれど昔作らせた立派なマントを着て、彼は道端のベンチで寝た。私はそれを見ている。昔は手入れもよく短かった彼のひげは、まるで穴居人のようにぼうぼうとはえていた。浮浪者ではあったが、何か風格があった。私は彼がどこで死んだのか知らない。おそらく、どこかの施療病院の共同病室へ、寒い夜につれて行かれたのではないか。……」

最新のものは『生ける限り』と言う題で、その最後はすでに述べたように一九七六年六月十四日であるが、これは短文である。

「休暇の前日。明日、テレザと私は出掛ける。今日は、荷物づくりで、もちろんテーブルコーダーも入れる。だから、この音も最後と言うわけである。

ムノン夫人との離婚訴訟の事などが、ぼかした形で出てくる。三番目の夫人となったテレザは、まだ内縁関係のようであるが、この女性と共にいる事で、シムノンは心の安らぎを感じている様子がわかる。それだけに、前夫人としては嫉妬にかられて『猫の前の小鳥』のような書物を公刊するのであるか。また、ジョルジュ・シムノンの著作に関するすべては、リエージュ大学のシムノン文庫に寄贈済みであり、シムノンについて調べようとすればリエージュ大学に行けば万事がわかるようにした事も書いてある。このモノローグのコレクションは、今後何冊出るかわからない。

さて、最後に、ジル・アンの『メグレ警視——あなたはどんなお人ですか』について述べてみようと思う。とりあえず、著者の前書きをお示ししよう。

「一九二九年から一九七三年にかけて、『怪盗レトン』から『メグレ最後の事件』まで、ジョルジュ・シムノンは三期に分けて（一九二九—一九三三）、（一九三八—一九四一）、（一九四五—一九七三）メグレ警視を主人公とする百以上の長篇および中篇、短篇小説を発表した。

これら小説の登場人物が、シムノンの空想からいかにしてある日生れたかは、本書に述べるところである。——『いいえ、私はメグレではありません』——と彼は否定するが、彼の小説の登場人物に『実在感を与える』ために意識的にも無意識的にも、彼自身の思い出から多くのものを取り入れたと考えられる。われわれのなした家系の調査によって、シムノン家の口伝えの情報の中から、区分けをしつつ、ある事実や姿を取り、他のものは棄てて、最も特徴的な輪廓を浮き出させることにより、いずれにせよ、この思い出の累積の

この文章が、いつも樂觀的ではない事を、私としては残念に思っている。向うについてから始める録音は、もっと軽快で楽しいものである事を私は希望している」

このようなモノローグが、ほとんど毎日続いているのである。そしてこの形式の本がすでに九冊出版されている。最初からその題名だけを書くこととくである。

- 1 我が老いし時
- 2 当り前の男
- 3 わが足跡
- 4 庶民
- 5 北の風、南の風
- 6 日なたのベンチ
- 7 穴蔵から屋根裏まで
- 8 我等の木蔭で
- 9 生ける限り

これらの題にはいろいろな意味を含ませている。たとえば4の庶民という訳の原語を直訳すると「小さな人たち」である。しかしここでは形の大小ではなく、そこらにいくらでもいるケチ臭い一般の人びとという意味である。7の穴蔵から屋根裏までは、話などが極端から極端に移り変わって行く時に使われるフランス語の表現である。こういう題目からも想像されるように、ベルギーのリエージュの町で貧しい庶民の子として生れたジョルジュ・シムノンは、庶民の立場で、毎日頭に浮かんでくる感想をテーブルコーダーに入れる。それを秘書のエートカン嬢がタイプし、それをシムノンが文章的に手を入れて出版社に渡すようである。

このモノローグ集を読んでいると、すでに引用したドニーズ・シ

重要性が証明できる。

伶俐できわめて注意深い若きジョルジュ・シムノンは、眼前に変化に富む複雑な一つの世界を持っていた。それは彼自身の家族なのである。その観察力、その記憶力、ある雰囲気や再現できるその素晴らしい才能は、家族の中にあつて、そこに真実の最初の基本の何たるかを知った。若い間に彼は多くの本を読み、次いでリエージュの新聞の雑報欄を担当し、最後に網の目のように分布している各種の運河を通じてフランス中を旅し、彼の将来の小説の舞台装置のための視覚的要素を蓄積しつつ、その最初の基本を充実させていった。それらのすべてが彼の作品に全面的に利用され、特に「メグレ」シリーズにおいて顕著である。

ジョルジュ・シムノンは七十四歳の誕生を迎えたばかり（一九七七年現在）であるが、彼はメグレ警視と四十四年間暮らしてきた。彼がメグレを愛し、彼自身メグレという小説の主人公の一部分をなしているのは当然といえよう。そのことは、シムノンがメグレの『回想録』を公刊した時に、はつきりとわかるのである。彼の作品の中にきわめてしばしば多量にちりばめられているメグレ警視の少年時代の思い出によって、シムノンとメグレとの『一体化』は証明されるのではないだろうか。本書の中で指摘するように、メグレの思い出は、まさにジョルジュ・シムノンの思い出であることが多い。たとえば『我が思い出』の中でシムノンが物語っていること、また、最近刊行された彼の著書（前記のモノローグ集のこと）によって確認されていることを見れば明らかである。場所まで一致する。メグレはある所で生れたが、まさにそこは、シムノンが暮らしていた所なのである。だから現実からフィクションへの移り変わりは多い。

メグレの身許、その創作のプロセス、その生活、その働き方、そ

の生き方、その行動などを私は本書で述べていこう。この仕事は文学の中の人物についてなされたものにもかかわらず、まるで実在の人物を扱っているような感を与え、このような研究は不思議なものといえる。その主人公がまるで実在の人物であるかのごとくに考えられるという事は、それを創造した小説家に対する最大の賛辞ではないだろうか。

ジル・アンリ氏の前書きは以上のごとくであるが、メグレの特徴を簡明に示している次の文章も有益である。

「メグレ警視の警察用人相書

メグレ、ジュール・フランソア・アメデ

アリエ県ムーランから二十五キロの所にあるマチニョン近傍のサン・フィアクルで生れる。エヴァリスト・メグレの一人息子。エヴァリストはロワール河岸の最も古い所領地の一つであるサン・フィアクル城の管理人を三十年間つとめた。

十九歳頃父を失う。ナントにおける医学の勉強も中絶した。ナントでは叔母の家に世話になっている。

身体——身長一メートル八十センチ、体重百十キログラム。

頭髮——濃い。黒みがかった栗色、こめかみにわずかではあるが白髪あり。

外観——がっしりとして強そう。一時期肥満していた。

ルイズと結婚。この女性アルサス生れで、叔父叔母によりバリーで育てられた。小肥り。料理上手。

家庭には子供なし。生れて間もない一女児を死なせている。

住所——バリ十一区リシャール・ルノアール大通り百三十番地、五階。

衣服——初期の頃は、ビロード襟のマント。山高帽、半長靴、丈

第二次世界大戦の開始は一九三九年（昭和十四年）といえるが、その前から欧州はヒットラーの活躍により騒然としていた。一九三五年から三七年まで、私はフランスにおり、ドイツも訪ねている。その一九三八年に、シムノンは、大西洋岸のラ・ロッシュェルの港町に滞在して第二十作目の『首吊り船』から第三十八作目の『大きなカフェーの人々』を一年間に書いている。驚くべき多作と言わねばならないが、大戦争の起る事を予期しての事だったのかも知れない。この一九三八年から一九四一年の第四十六作『フェリシエ』はそこにいる』までが第二期あるいは中期と呼ばれるものである。

第三期あるいは後期と呼ばれる時期は、戦争の終わった一九四五年から始まる。シムノンはバリに住んでおり、第四十七作目は『メグレ激怒す』である。すぐに四十八作目『メグレのバイブ』を書き、欧州を去って一九四六年からカナダ、アメリカと移り住んでいる。第四十九作目の『メグレ氏ニューヨークへ行く』はカナダのサン・アルグリット・デュ・ラックで書かれており、それ以後、第七十三作目の『メグレと政府高官』までアメリカで書かれている。一九五五年フランスに帰ってのものは第七十四作『メグレを張る』である。

スイスのノランにあるエシャングンの城に移ったのは一九五七年以降で、第七十八作『メグレの旅をする』であり、それが第八十九作『メグレと幽霊』まで続き、一九六四年、エシャングンが道路拡張のために居られなくなり、エバランジュに「兵營のような」大邸宅を造って移るのが一九六四年である。ここで書かれたのが第九十作目『メグレたてつく』であり、それが最後の第百二作目『メグレ最後の事件』まで行くのである。

夫は黒のサージの上下。ネクタイはよく結んでない。それ以後おしやれになった。背広に白いワイシャツ。ズボン吊りにチョッキ。厚い外套にソフト帽。

習慣——シガレットは吸わずパイプのみ。頭をかいて毛を逆立ててしまう。ダンス、トランプのブリッジ遊びなどはしない。自動車の運転はできない。甘い物は好きではない。初期においては、その事務室の暖炉の火を掻きたて、手を後ろに組んで暖まる。

ドイツ語は片言。英語とフルターニュ語を理解する。

好みの言葉『私は何も信じません』あるいは『何もありません』顔を洗うのに、そこら中に水をかける。大理石のテーブル上で書くのが嫌い。まるでシミのような小さい字を書く。妻の留守の時はバリにいるのを好まない。

勤務中に三回負傷。その仕事振りから、同僚によって、いい加減な人間だと思えば考えられていた。

退職してから、ムン・シユール・ロワールの小さな家で暮らしている。

われわれがメグレ物を読んで感ずるのは、そこに第二次世界大戦の影が見られない事である。メグレ物を書き始めた一九二九年から第一期あるいは初期といわれる一九三三年の間には、十九冊のメグレ物が書かれている。最初の『怪盗レオン』は彼のヨット「オストロゴート号」上でベルギーにおいて書かれたが、第二作以後は、バリ南郊のモルサング、第五作の『男の首』がバリのホテル・エーグロン。それから再び「オストロゴート号」で旅に出て、結局、地中海のボルクルールに行き、ここで第十九作の『幕をとじてから』を書いている。それから五年間の中断である。

これでわかる事は、バリの町の中で起きた事件を扱うメグレ物を書いている時、ジョルジュ・シムノンはバリにいない事が多い。特にアメリカにいた時、およびフランスでもラ・ロッシュェルというバリから遠く離れた港町に滞在していた時に多作である。という事は、若くしてベルギーのリエージュという田舎町からバリに出て来たジョルジュ・シムノンの頭の中には、華やかなバリの町々の様子、その雰囲気などが、はっきりと刻みこまれていたといえる。だからバリーを離れても、バリーの地図を見れば、すぐにその町の様子、雰囲気その他が思い出されるのであろう。ただし、独軍占領時代はバリにいなかった。だから、その頃の事は書きようがないのかもしれない。

最後に、ジョルジュ・シムノンのメグレ物を考える場合、すでに言ったように、彼がロマン・ロマンと呼んでいる本格的な小説の事を無視するわけにはいかなのである。我が国においては集英社からシムノンの小説集十二巻が刊行され、その翻訳は悪くないし、選ばれた作品はほぼ代表的と言える良いものであるから、一読の価値はある。そして、メグレ物にはほとんど見られないセックス関係の描写などに注意する事は必要であらう。シムノンの著作の表の面を示すものが、これらロマン・ロマンと彼が呼んでいる本格小説であるとすれば、メグレ物は裏の面を示しているといえるのではあるまいか。念のために集英社版の十二冊の題名を書いておこう。

(1)雪は汚れていた (2)ストリップ・ティーズ (3)アナイスのため
に (4)片道切符 (5)新しい人生 (6)リコ兄弟 (7)日曜日 (8)かわい
い悪魔 (9)港のマリー (10)妻のための嘘 (11)ドナディユの遺書 (12)
ビセートルの環

勿論、百冊を越えるシムノンの本格物のごく一部ではあるが、こ

れらを読めばほぼシムノンの力量を知る事ができよう。

また、最近になって、ガリマール社から、コレクション・フォリオの名で多くの作家の作品が新たに出版されているが、その中にもちろんシムノンがある。私が丸善で入手したものは、昭和五十三年八月の現在までのところ十三冊で、その中には、『ドナディユの遺書』のように日本訳のあるものも存在するが、ほとんどは訳されていない。たとえば、この中に『フェルショール兄弟の長男』というのがあるが、読者に与える印象はきわめて強烈であるといえる。これは映画にもなっている。『ビタール一家』においては、嵐の海での舟の難破の描写など迫真的とも言えようか。

つまり、このような本格小説を知って、シムノンが娯楽のために書くというメグレ物を読めば、ジョルジュ・シムノンという巨人の全貌をうかがう事ができるわけである。そして、その片鱗を、前記集英社版の翻訳によって知る事ができる。

シムノンと私のつき合いはすでに三十年というわけであるが、その本格物もメグレ物も日本にひろまる事が非常に遅かったという感じを私は持っている。それはなぜだろうか。欧州全般にひろまっているメグレ物だけをとっても、その盛況とは異なって、今日やっと河出書房の五十巻ばかりの翻訳が出ると共に、テレビなどでも扱われるようになったのである。

ひろまりが遅かった理由は種々あろうが、私見によれば我が国で戦後早川あたりから出されたメグレ物の翻訳が悪かったという事が大きな原因ではないかと思う。たとえばある翻訳に「L'Hotel Matignon」というのがあったが、これをマティニオン・ホテルと訳して

あったので、呆れてしまった。フランスの首相官邸の事なのである。そして、辞書を引けば、それはすぐにわかるはずである。これと同様に「Matignon」をエリゼ宮と言うだけであるが、フランス大統領の官邸なのである。そして、そう言わなければ読者にはわからない。こういう、いい加減な翻訳が、シムノンのメグレ物を駄目にしてしまったのではないかと思う。

英米と違って、フランス語の翻訳をする人の数は限られている。その世界が狭いだけに、相互批判も少ない。フランス映画の字幕屋さんに小遣金かせぎの「やつつけ仕事」としてハヤカワ・ミステリが利用されたのではないだろうか。そんな気が私にはするのである。

結局、戦後のメグレ物は翻訳が悪かったために一般から迎えられなかったと、私は考えている。それでは現在出版されている河出書房のメグレ物はどうか。原書を私は持っているの、おかしいと思つたところはすぐに原書に当たっている。たくさん訳者であるが、まず一応の水準に達していると、ちょっと偉そうな顔をして言わせてもらおう。私は翻訳を専門とした者ではないが、昭和十七年頃『パストール伝』という、四百字づめ原稿用紙千六百枚ばかりの翻訳をしている。そして、その訳書は今日でも生きているという事実をふまえて、右のように言う資格を私は持っていると思うのである。

メグレ物の翻訳は悪くない。すでに言ったように、集英社のシムノンの本格物の翻訳も良心的であるという事が、今日のシムノン・ブームを作ったのではないだろうか。そしてこれは、今後も続くのではないか。そのように私は考えるが、はたしてこの予測は当るかどうか。

研究

英米におけるメグレ像 小林武

探偵小説においても普通小説と同様、第一作が見事に成功を収めるということとはよくない。作品自体がもたねばならぬ力は当然のこととして、用意周到な出版のポリシーと時機にかなっていることが重要な条件になってくる。その点、シムノンのメグレ・シリーズの出版は十分考え抜かれたものだった。

シムノンと出版元は当初からメグレ物語をシリーズ化するつもりで計画し、シムノンはそのためになんと一年間に八冊のメグレ物語を書いた。しかも、最初からできるだけ多数の読者を見こんで、それらを廉価なイエロー・ベイベーに印刷し、従来のベイベーバックの二分の一の定価で発売した。現代の出版社のベストセラーづくりも顔負けの大胆な計画である。この計画は図にあたり、フランスでは短期間のうちにメグレ物語は爆発的人気を得、翌一九三二年には数本が映画化された。一躍人気作家になったシムノンは、バブリシテイのためにガラスの部屋のなかで、実際にメグレ物語を書いてみせることもやったことである。

また、メグレの誕生は時機にもかかっていった。メグレが出版された年は、一九二〇年にはじまる、といわれる探偵小説の黄金時代がちょうどなかばを迎えた頃である。この三十年前後は探偵小説全体

がある種の転換期にさしかかり、各国で特徴あるミステリがいつせいに開花した時期にあたっている。

アメリカでは、ヴァン・ダインが根付かせた本格的探偵小説を、エラリー・クイーン（『ローマ帽の秘密』一九二九年）とJ・D・カー（『夜歩く』一九三〇年）が継承・発展させる一方、ダシル・ハメットが出現して（『血の収獲』一九二九年）、まったくこの国独自のミステリ、ハードボイルド小説を流行させた。

クリステイー、セイヤーズ等の活躍する本場イギリスでも変化が起こっていた。A・B・コックスは、一九三〇年にアントニー・パークリー名義で出版した『The Second Shot』の序文で「純粹で単純な、古い謎解き小説の時代は過ぎ去った。これからはそれに代わって、性格の謎」に重きを置いた、より文学的な探偵小説の時代になるだろう」という意味のことを述べた。そしてこの宣言をフランシス・アイルズ名義で書いた倒叙ミステリ『殺意』『犯行以前』で実践したことは、よく知られている。

ようするに英米で、ヨーロッパで、新しいミステリが熱心に求められていた。シムノンのメグレ物語はその要求にびたり応えたものだったといえるだろう。もちろん、黄金時代前期の作家たちの作